異象論水晶凝視

油田敦彦

柔軟なる果實の反射鏡が極めて美味な神を創造するそして積乱雲の生ぶ毛の大地の子宮から抽出された虹のような夢であり静物の祭壇の卵殻から落下する白地黒斑の瀑布である柘榴の海溝に現出する北極光（オーロラ）は咽喉の七絃琴をかき鳴らす黄金の颱風を排泄するこれは胡桃のような白蓮の博物學の現象である夢想家のように魚腹の水彩画の裡へと墜落する火蜥蜴（サラマンドラ）の暁露は噴水の臀が形成する神聖座標軸に酷似する美貌の痙攣は匿名の葉緑素のような處女宮の黒髪が金雀児の微風に戦ぐのを見るその羽毛の動揺のような内耳の睡眠心臓病の水晶體は神秘的に肋骨の上を円舞する紅玉の花弁は土龍の受胎から両性具有の硝子までを廻転する時計針に附着する蒸留器（ランビキ）の眼瞼である雪花石膏（アラバスタ）の蝸牛の燐光に誘われる秋の牧羊神（パン）よ羅針盤の熱風のように胡桃の乳房を夢想せよ地下茎の蔓延る経緯儀に水成岩の慈雨が降り掌骨から心臓の避雷針までの距離を測量する卵鏡は雲形定規の膨張を霊感する青磁色の春の漏斗から流出する水準器の夕暮は渓谷を下る透石膏の少女の手鏡を覗き込むおそらく太陽の唾液は眼窩の等

測図を踏青するだろう錬金薬（エリキサ）を懐中に抱く金髪の綿雲は思春期の金剛石に森羅萬象の雷鳴を象嵌する鳥類の骨相學が胎児の豫感する葡萄酒のような雪景色の剝製を造るその鱗粉のように縞瑪瑙の視線上を通過する優美なる熾天使（セラピム）湖底の無花果は脳髄の水平線で薔薇の花粉を採取する脆弱なる淡水繁殖を刺繍する原色の潜水夫は分光器の情熱と結合するそして氷塊は鏡板上で半睡状態にある磁気を帯びた黒子の寒波が義眼の太陽に羊歯のような髪を放電する真珠の稜線に湧出する突然変異の蜃気楼は純粋に緑色を保つそれは蠟細工の貝殻のように光澤ある革質の稲妻を賞美する紺碧の望遠鏡は全ての魚族に月蝕の嗅覺を与える精緻なる鳥の微笑は青藍色の接吻のように迅速に脳髄の鏡面に落下する蜻蛉の表皮は聖體パンの網状突起物に透明なる雷雲を放牧する柔軟なる海泡石の嘴が蒼空の関節から寒冷なる睡眠を盗む鱗状の螺鈿を分泌するそれは一角獣の群棲する美人草（ベラドンナ）の芳香性の曲線を殺戮する筋肉質の積乱雲は蛇の傳説をその波立つ風景の内部に彫刻する蝶の皮膚から流出する洞窟の微笑は斑状出血のように微かな物音を残して再び廃墟の天蓋には帰らない

畸型美よ！